

# 第11回南日本経済賞

第11回南日本経済賞(南日本新聞社主催)は、さかうえ(志布志市、坂上隆社長)、下堂園(鹿児島市、下堂園豊社長)、マトヤ技工工業(曾於市、益留福一社長)の3社に贈られる。IT(情報技術)を生かした農産物

## あす贈賞式

生産の効率化システムの開発、鹿児島県の海外輸出のいち早い取り組み、食肉処理の省力化機器製造などを通じ、第1次産業が盛んな地域振興への貢献が評価された。贈賞式は10日、鹿児島市の南日本新聞会館である。

## さかうえ

(志布志市)

耕起、種まき、定植。作物あたりの農作業を118の工程に分け、従業員は工程ごとに作業内容や写真データをパソコンに入力する。蓄積したデータを元に2007年、独自で「農業工程支援システム」を開発。計画栽培と収穫予測を可能にした。

坂上隆社長(47)が芝園を営む実家にUターンしたのは1992年。自身でノートに作業内容や生育状況のデータをとりつけた。パソコンの出現とともに、記録媒体はデジタルへ。天候などに左右されやすい農業リスクをデータで克服、フランクやカルビーなど複数の会社と大口契約を結ぶようになった。契約栽培に次ぐ事業の柱である牧草飼料事

## IT生かして計画栽培



耕作放棄地などで栽培する飼料用トウモロコシ。県内の畜産農家に販売する 志布志市志布志町

業は03年から始めた。輸入飼料に頼る近隣の畜産農家から意見を吸い上げ、飼料用トウモロコシの栽培を開始。畜産農家から処理に困るふん尿を譲り受け、堆肥にして畑へ。その畑で育てたトウモロコシを飼料に加工し、畜産農家へ販売する循環システムをつくり上げた。同社が使う計1000畧の畑は9割が借地。その多くは耕作放棄地

だ。市内約430カ所に点在し、生産性は決して高くないが「周囲のニーズに応えることが価値の創造につながる」。飼料栽培は契約野菜の連作障害を防ぐ効果もあり、地域・畜産農家・自社の「三方よし」の事業に育った。「これからは規模の拡大ではなく、地域に貢献し、環境に持続可能な性の高い事業が求められる」

全国から20〜30代の就農希望者が集まる同社では、入社3年目で予算作成から商品納入までを任せる。経営者マインドを持たせる狙いで今後は他業種との事業提携も進める。坂上社長は「農業で何かを成し遂げたいと考える若者に、挑戦の場所を提供したい」と夢を語った。(高橋佑紀子)



全国から若い就農希望者が集まる。受賞を喜ぶ坂上社長(前列左から4人目)と社員たち

●さかうえ 1995年に坂上芝園として法人化。2009年に現社名に変更、10年株式会社化し、住友商事と資本提携した。13年に全国農業コンクール全国大会でグランプリを受賞。坂上社長は九州大学大学院博士課程に在学中。資本金5200万円。従業員42人(16年8月現在)。志布志市志布志町安楽2873の4、099(473)1990。